

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：32643

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13759

研究課題名（和文）戦前期日本における茶産地の比較分析 茶消費への対応を中心に

研究課題名（英文）A comparative study of tea-producing areas in pre-war Japan

研究代表者

粟倉 大輔（AWAKURA, Daisuke）

帝京大学・経済学部・講師

研究者番号：60757590

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦前期の日本における、静岡や茨城などの茶産地についての比較分析を試みるものである。研究期間中には新型コロナウイルスの感染拡大という状況も重なり、結果として静岡県と茨城県の茶業の個々の分析にとどまった。しかし、茨城県の分析では、それまでほとんど研究されてこなかった明治期の茨城県の茶の生産と流通の動きについて明らかにした。また、静岡県の分析では、茶の流通の実態について物流インフラを中心に分析した。また、明治初期の清水港の開港運動については初めて具体的に論じ、1899年の清水港の開港すなわち茶輸出港化について、その20年前から静岡県人がその実現を目指していたことなども明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果のうち、学術的意義としては、同じ輸出産業であった製糸業と比べると、まだ研究蓄積は少ない近代日本の茶業史研究の進展に幾ばくかの貢献をしたことである。また、社会的意義としては、ほぼ静岡県に限られてしまったが、シンポジウム等を通じて清水港の茶輸出港としての役割を静岡県民に周知できたことである。茶産地を擁する静岡県でも、茶業や茶輸出の歴史は、広く県民の間で知れ渡っているわけではない。そうした状況のなかで、本研究の成果は静岡県と茶業との関係性を静岡県民に理解してもらうことにつながったものと思われる。

研究成果の概要（英文）：This study attempts a comparative analysis of tea-producing areas in prewar Japan, such as Shizuoka and Ibaraki. Due to the COVID-19 pandemic during the research period, the study was limited to individual analyses of the tea industries in Shizuoka and Ibaraki prefectures. However, the analysis of Ibaraki Prefecture shed light on tea production and distribution trends in Ibaraki Prefecture during the Meiji period, which had been little studied until then. The analysis of Shizuoka Prefecture also focused on the logistics infrastructure to analyze the actual state of tea distribution. The study also specifically discussed the movement to open Shimizu Port in the early Meiji period for the first time, and revealed that the people of Shizuoka Prefecture had been aiming to realize the opening of Shimizu Port in 1899, i.e., to become a tea export port, for 20 years before that.

研究分野：経済史

キーワード：茶業 静岡県 茶産地 清水港 茶輸出

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、戦前期（1868～1940年）の日本茶業史を「産地」と茶消費との関係性の観点から解明していくものである。日本経済史・産業史研究において、茶（緑茶）は生糸と並んで戦前期における主要輸出品＝外貨獲得源として、日本の工業化に貢献した存在として指摘される。その一方で、1880年代以降、粗製濫造問題の表面化、アメリカ市場におけるインド紅茶の台頭、技術革新の不備（製茶機械の導入の遅れ）などを要因として、茶の輸出は不振・停滞を余儀なくされていく。やがて1920年代に入ると、茶の輸出は続いていくものの、次第に茶生産は国内向けのものにシフトしていった。こうしたことから、茶が戦前期の工業化に果たした役割は生糸ほどではないと研究者に認識され、それが日本経済史・産業史研究における茶業研究の蓄積の少なさにつながっていったと考えられる。

さらにいえば、茶輸出の増加にともない静岡をはじめ各地で茶産地が形成されていったことは明らかにされてきたものの、各産地がその輸出（海外の日本茶消費）の盛衰を受けてどのように生産や流通を変化させてきたのか、あるいは海外市場から国内市場へのシフト（国内の茶消費の重点化）をどのように成し遂げたのか、など個々の茶産地の具体的な分析や、それらの比較分析が茶業史研究のなかでは、まだ十分になされてこなかったといえる。

2. 研究の目的

上記の茶業史研究状況を学術的背景として、本研究は戦前期における日本各地の茶産地がその時々の茶消費をめぐる動き（輸出の盛衰や国内消費向けへの転換など）にどのように対応したのかを明らかにするとともに、それらを比較検討しその共通点・相違点を明示することを目的とした。こうした点を通じて、従来の日本経済史・産業史研究における茶業史研究の深化を図ることもねらいとした。

さらにいえば、こうした歴史研究を最終的には、現代の日本茶輸出の促進や国内の茶消費の増加などに寄与していくことについても目指した。近年、日本茶の輸出が盛んになされている一方で、茶生産者の後継者問題や、茶生産量および茶園面積の減少など、茶産地や茶の国内消費をめぐる環境は必ずしも好調であるとはいえない。こうしたなかで、マーケティング戦略や、茶の効能分析、栽培技術の改良などが、現代の茶業研究の中心といえるが、それらと本研究のような歴史研究との交流はこれまでほとんどみられなかったといえる。しかし、戦前期の日本茶業史の動きのなかには、現代の日本茶輸出にも取り入れ得る歴史的事実も含まれている可能性がある。そのため、本研究は現代の茶業発展の糸口を見つけ出すことについても目的とした。

3. 研究の方法

本研究の分析にあたっては、「産地形成の方向性には消費地からのフィードバックが関係しているのではないか」という仮説を立てた。また、具体的な事例として、国内消費への転換も果たしつつ輸出も継続し得た静岡、開港場である横浜に比較的近かったものの輸出継続が難航した猿島、当初は輸出茶生産中心であったが1890年代以降国内消費にシフトした宇治の3つの産地を分析対象とすることを試みた。これらは、海外と国内の消費への対応の成功（事例＝静岡）、海外消費への対応の失敗とそこからの転換（事例＝猿島）、失敗ではなく産地の特徴（玉露などの生産）を活かしての転換（事例＝宇治）など、様々な消費動向への対応を浮き彫りにできる存在といえるため、分析にあたっての事例とした。

こうした産地が、消費地からの評価や課題などのフィードバックをどのように受け止めたのか、また、そのうえで消費までの工程、すなわち荒茶生産（茶の一次加工）から茶の再製（商品化のための二次加工）輸出・移出（国内外の消費地）といった一連の茶流通の動きがどのように変化したのか、ということについて、本研究では茶業関係の文献・統計資料・業界誌、『領事報告』、当時の新聞記事（全国紙および地方紙）、各地の資料館などに所蔵されている未公開の資料などを利用しながら明らかにしていくことにした。

4. 研究成果

しかしながら、研究期間中に、世界規模での新型コロナウイルス感染拡大という事態に直面し、本研究も大きな制約を受けることになった。結果として、研究期間中に分析をおこなうことができたのは静岡と猿島（茨城）のみであり、宇治（京都）などそれら以外の茶産地への訪問は実現できずに終わった。また、茶消費という視点からの比較についても、あまり含めることができなかったと考えている。どちらかといえば、茶産地個々の分析に終始してしまった観がある。

このように、研究成果についても、テーマと比べるとかなり限定的なものとなったと言わざるを得ない。それでも、これまで研究蓄積が少ないともいえる茶業史研究の進展には、幾ばくかの貢献をしたと考えている。周知のように、茶は生糸と並ぶ戦前期、特に明治期における主要輸出品であったにもかかわらず、その歴史的な研究は、製糸業と比べるとかなり少ないのが現状である。このように、茶業史をめぐる研究が今なお発展途上の段階にあるなかで、本研究もいくつかの成果を出すことができた。

茨城県の事例

まず、茨城県の事例であるが、これは明治初期の茨城県における茶の粗製濫造問題およびそれにとまなう茶の生産や流通の影響について論じた。茨城県の粗製濫造問題は、すでに『茨城県史』をはじめとする自治体史や、茶業史関係の文献などですでに取り上げられてきた。しかし、この問題が茨城県の茶の生産や流通にいかなる影響を及ぼしたのかという点についての研究はこれまで見られなかったといつてよい。猿島茶は、幕末期から輸出茶として横浜に運ばれていたことから、当然のことながら、茶の粗製濫造問題は茨城県の茶業にとつても死活問題であった。この粗製濫造問題の分析するにあたっては、『農商務統計表』などの統計資料だけでなく、茨城出身で猿島茶の生産や輸出の進展に大きな役割を果たした中山元成の資料(『中山元成文書』)を利用した。分析の結果、粗製濫造問題は、茶の海外需要の増加への対応(供給が追いつかないことによる茶の粗製化)、日本人の茶商人・茶売込商、および欧米人外商などの不正取引の発生、当時のインフレーションによる物価高騰(生産コストの上昇)、茶の生産者側の意向(低コストで高利益を得る)、といった複数の要因により発生したことがわかった。また、この粗製濫造問題は、中山元成などもその撲滅に尽力したものの、その一掃は容易ではなく、明治後期になつても見られた。それでも取り締まりが強化されたことで、徐々にではあるが、貿易市場での茨城の茶の評価も上向いていくようになったことも明らかにされた。さらに、粗製濫造の撲滅には、当然中山などの指導的立場の尽力や、貿易市場の動向を視野に入れての生産の確立などが必要であった一方、茨城県の茶生産における土地生産性や生産者の経営状況にも目を配る必要があったことも指摘した。

静岡県の事例

静岡県については、作成者も以前からその茶業については分析をおこなつてきた。静岡県は、全国有数の茶産地であり、また戦前期の主要な茶の輸出港であった清水港を擁することから、特に分析を深める必要があった地域である。

静岡県の分析にとまなう研究成果は、特に清水港との関係性が強いものとなつた。ここでは静岡県における鉄道・港湾・道路といった物流インフラがいかに整備されていったのか、またそのことが清水港からの茶輸出にいかなる影響を与えたのかを考察した。清水港は開港前から横浜港への茶の移出港としての役割を果たしていたが、東海道線開通によりその役割が鉄道に取って代わられる。これにより清水港の開港運動が盛んになり、清水開港へとつながっていく。やがて牧之原をはじめとする一大茶産地を後背地にもつ清水港が日本の主要輸出港になっていくが、そこには清水港の機能拡充(外国航路の拡大、修築工事にともなう規模拡大)や、東海道線による静岡県の全国の茶の集散地化、さらに道路整備の進展とトラックの普及などが背景にあった。また、ここにあげた清水開港という、東海道線開通後におこつた開港運動がよく知られるが、実はそれが起こる20年前にも、同じような清水港の開港運動が当時の静岡県令(県知事)や地元民によって展開されていたことは、これまでほとんど明らかにされてこなかった。本研究の一環として、資料上の制約があるもののその実態の一部がはじめて明らかにされたといつてよい。この運動の背景には、当時の政府の条約改正交渉があり、この交渉のなかで、下関のほか1港が開港場に指定される可能性が出てきた。この動きに呼応する形で清水港の開港運動も引き起こされた。この運動のなかで、やはり県令や地元民は清水港の開港で茶輸出が盛んになることを考えていた。結果として条約改正交渉が不調に終わったことでこの開港運動もそのまま終えることになった。しかし、この運動は清水港の開港、すなわち茶輸出港化に向けての第一歩といえるものだったのである。

以上、多くの成果とは言い難いかもしれないが、それまでの茶業史研究ではあまり重視されてこなかったことや、新たな出来事などの分析をおこなうことができた。また、本研究を進めていくなかで、静岡県内でおこなわれたシンポジウムで、茶流通における東海道線の役割や清水港の機能、さらには明治初期の清水開港運動のことを発表する機会にめぐまれた。こうした茶業史関係の報告は、静岡県民に地元の茶の生産・流通・輸出などについての関心を一層引き立てることにつながつたのではないかと思われる。実際に、静岡県民であっても、静岡の茶の歴史についてはまだまだ認知度が少ないように見受けられる。本研究にはこうした社会的な意義も持つていると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 粟倉大輔	4. 巻 -
2. 論文標題 1879年の清水港の開港運動	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 清水港の歴史から見る日本とアジア～地方史研究の成果と課題～	6. 最初と最後の頁 34-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 粟倉大輔	4. 巻 -
2. 論文標題 茶業史における物流インフラの整備 静岡県の事例を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ふじのくに茶の都ミュージアム研究紀要・年報2019	6. 最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 粟倉大輔	4. 巻 -
2. 論文標題 明治期における茶の粗製濫造問題と中山元成の活動	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 幕末・明治の茶業と日米交流 中山元成とG・Rホールを中心に	6. 最初と最後の頁 195-232
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 粟倉大輔
2. 発表標題 東海道線開通、清水港国際貿易港化と静岡茶
3. 学会等名 初期島田茶業史展vol.4「明治・大正時代 統一静岡茶の誕生」シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 粟倉大輔
2. 発表標題 戦前期における輸出茶産地の比較分析 - 静岡と猿島の事例を中心に
3. 学会等名 政治経済学・経済史学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関